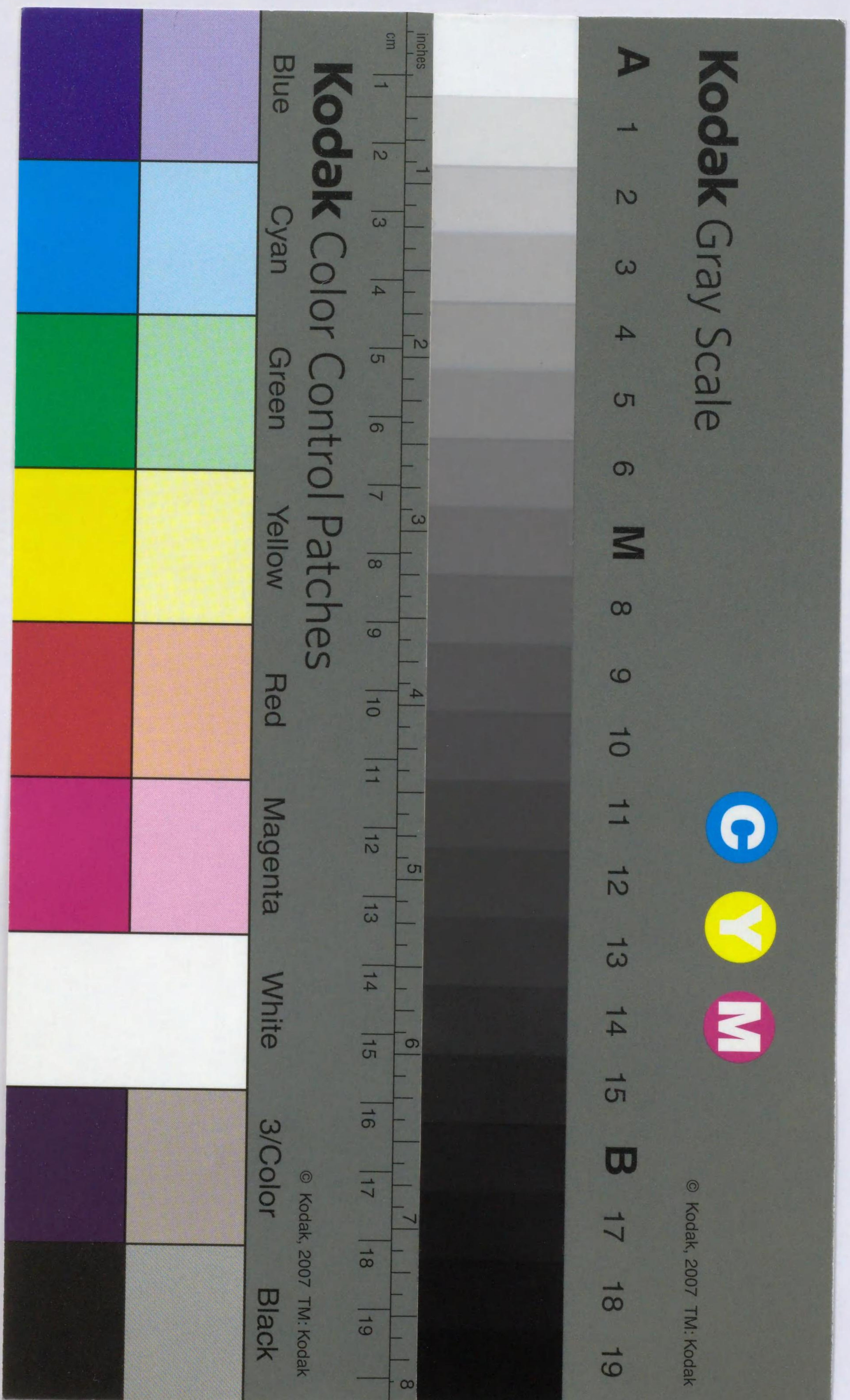


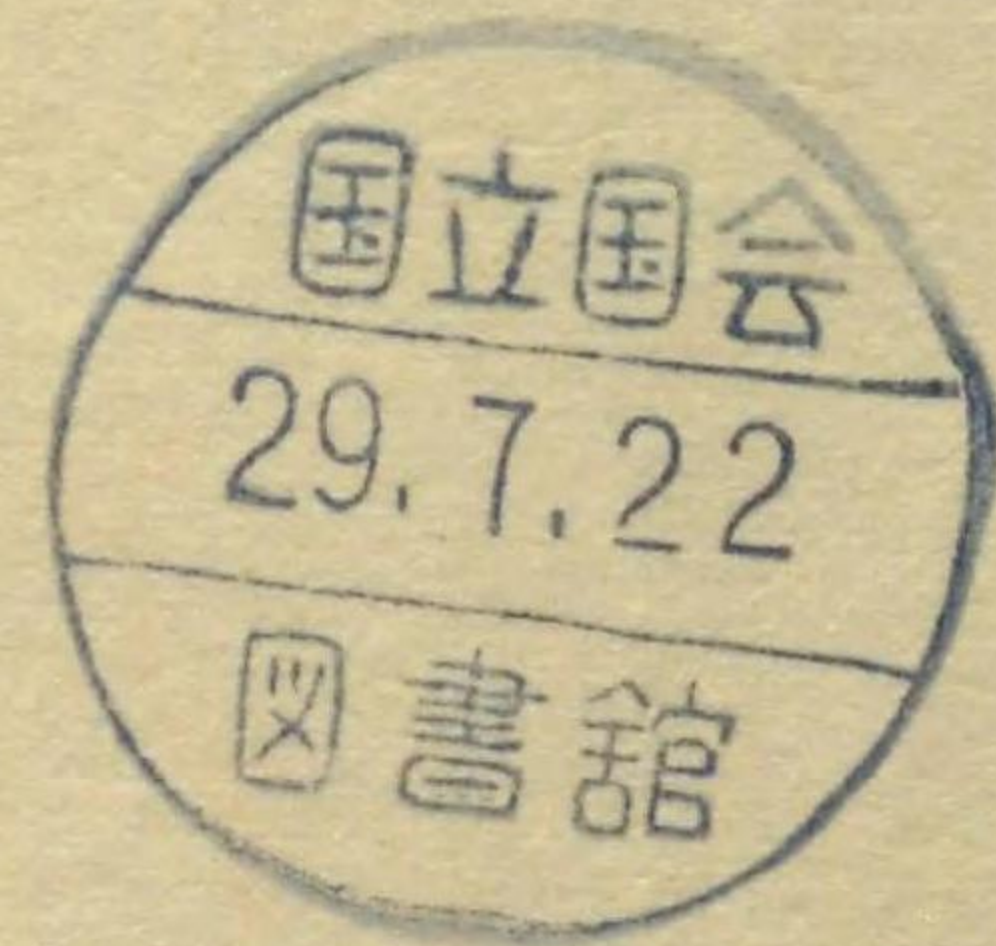
承德本古謠集解說

911. b  
Sy961  
軸·箱





911.6  
Sy 961



336218

# 承德本古謠集解説

文學博士 佐佐木信綱撰

甲子六月、京都帝國大學圖書館に於いて、近衛公爵家から寄託せられた古典籍を見ることを得た。その中に、上代の歌謠研究の上に、重要な寄與を爲すべきものとして、始めて學界に紹介した二部の書があつた。その一は琴歌譜であつて、他の一は、すなはちここにいふ承德本古謠集である。

この書は、縦凡そ九寸五分の斐紙を繼ぎ合せ、黒界を引いて書寫したもので、首題尾題なく、書名も明かでない。卷首は、もと書名等のあつたものが脱落したか否か、不明である。奥には「承德三年三月五日書寫了上」の奥書があり、なほ引き續いてあつた文が、途中で脱落したものであらう。承德三年は堀河天皇の御宇で、すなはち康和元年である。書風字體、その當時の書寫と認められる。前半は大概楷書で書き、支多乃見加止乃御神樂の第一首の二句目、於古奈布也未乃以下は、草體を交へて書いてあるが、筆者は多分同一人とおぼしく、ただ書寫の日時が變つた爲なのであらうか。前記の如く、書名が無いので、その内容よりいへば、承德古鈔本東遊風俗神樂歌鈔といふべきであるが、今略して、假に承德本古謠集と稱することとする。何人の撰したものかも不明である。初の一二首は歌ひ方通りに譜をも記し添へ、第三首以下は簡略になつて、後には單に歌詞のみを記し留めてゐる。一字



一音に漢字もて書いてあるが、今まづ、その歌詞とおぼしきものを拾つて、漢字假字交りに書き改めこれに所見を附して次に掲げることとする。なほ書中、「末」を悉く「未」に作つてゐるが、今これを「ま」と讀むこととする。また、「左」と「太」とまぎらはしいものが少くない。

### 一歌

はれむな、手を整へるな、歌整へむな、さむのね、を、を、を、を、

以下數首は、東遊歌である。樂章類語鈔に載せたものには、「さむのね」を「さかむのね」となしてゐる。「相摸の嶺」の意と思はれるから、「か」が脱したのであらう。

### 二歌

え、我が夫子が、今朝のことでは、七絃の、八絃の琴を調べたる如や、なをかけ山の、かづの木や、を、を、を、を、

「七絃の」は原文「奈奈用乎乃」に作つてゐるが、用は川の誤であらう。「かづの木や」は、原文の字無きも、小字の註に「自可川乃至也詞」云々とあるから、川を補つた。「八絃の琴を調べたる如」は、古事記弘計王の詠に、「如調八絃琴」とあり、なをかけ山のかづの木は、

萬葉集卷十四に、「阿之賀利乃和乎可難夜麻能可頭乃木能」といふ歌がある。

この次に「已上曲唱各一度」とある。

### 駿河歌

や、うご濱に、駿河なる、宇止濱に、うち寄する、なくさの妹、言こそよし、言こそよし、なこくこそよし、

はじめの「うご濱に」の「に」を「介」に作つてゐるは、「爾」の誤であらう。「うち寄するなくさの妹」は、樂章類語鈔に、「宇知余須留奈美者奈々久佐乃以毛」とある方がよい。末句も誤があらう。

よなやすらけ、あなやすら、やすら、あなやすらけ、練の緒の衣の、袖を垂れてを

「袖を」以下は別行としてゐる。樂章類語鈔には、上句に續いてゐる。

鳥ゆゑに、濱に出て遊ぶ、千鳥ゆ

「鳥ゆゑに」の「に」を、余に作つてゐるのは誤であらう。「千鳥ゆ」の次に數行の空白が置いてあるのは、書本が脱落してゐたものであらう。樂章類語鈔の方が完全に傳はつてゐる。

### 求子歌

あはれ、ちはやぶる、賀茂の社の、姫小松、あはれ、姫小松、



求子の歌の第一段で、二段は無い。古今集に、冬の賀茂の祭の歌、藤原敏行朝臣として、載つてゐる歌である。近世再興の諸社で用ゐる求子歌も、下句は歌はない例であるから、諸寫本にもこれを記載してゐない。古くからさうであつた事が、これによつて明かである。

加太於呂之

大ひれや、小ひれの山はや、寄りてこそ、寄りてこそ、山はよ、よらなれや、とほめはれ

山は以下を、樂章類語鈔には、「やまはよらなれやとほめはあれど」とある。

以上は、いづれも東遊歌として、樂章類語鈔等に傳へてゐる。

阿良太

荒田あらたに生ふる、富草の花、手に摘つみ入てや、宮へ參まゐらむや、參らむや

「參らむや」につづけて、「風俗」とある。「阿良太」の前に入るべきを落したので、ここに書き載せたのであらう。この歌は、風俗の中に、荒田と題してある歌である。富草の花の句は、也須禮花の歌の中にも出てゐる。

八處女やなごめは、誰たが八處女ぞ、立つや八處女や、立つや八處女や、  
神かみの坐す、このみ社に、立つや八處女や、立つや八處女や、

同じく風俗に、八乎止女と題してある歌である。「坐す」を原文「也須」とせるは誤とおぼしい。樂章類語鈔にも「加美乃也須」とあつて、註に「一作萬須」とある。

奈者布利

なはのつぶら江に、秋なれば、霧降りわたり、なはのつぶら江、

末

つぶら江のや、せなや、秋なれば、霧降りわたり、なはのつぶら江、

本歌の「霧降りわたり」の「た」を「支」に作つてゐるは誤であらう。歌の次に、「或説春なればとも唱ふ」とある。風俗に、奈末不利、また難波之都布良江とあり、「秋なれば霧降り渡り」の句は、十二月から五月までは、「春なれば霞みて見ゆる」と歌ふと傳へてゐる歌である。

吉野吉水院樂書にも「最勝講ヨリ秋ナレバ、五節ヨリ春ナレバト歌フ」とある。

太乃之利者也之

なはへ行く、たのしり早し、己おのが子を、鷹にとられて、なく鳩の、目には見えすて、音ねのさやけさや

「或説になくさつのと唱ふ」と記してある。「左」は「太」の誤で、「鳴く鶴たづの」であらう。

この歌は、従来いまだ知られなかつた歌である。「目には見えすて」云々の句は、古今集秋の部に、「秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の目には見えすて音のさやけさ」の歌がある。さてこの



一章の中心をなす「己が子を鷹にとられてなく鳩の」といふ句に就いて見るに、或は、權門の力などによつてその娘を召し上げられた歎の聲とも聞きなされる。はじめの「なは」は、「なはのつづら江」の「なは」であらう。

須加无良

菅群のや、はれ、小菅群のや、むらのや、小菅群のや、生ひ出ば、我こそ搔い刈らめ、

「或説に、かいよせめとも唱ふ」と記してある。風俗に菅牟良と題してある歌である。

之奈乃

信濃野なるや、はれ、武藏野なるや、野なるや、澤なるや、信濃笹草や、馬に飼ふなや、や、はれ、駒に飼ふなや、けいのを枯らすなや、信濃笹草を、

この歌も他に所見が無い。往昔より牧場の多かつた信濃の歌とて、愛すべき牧歌の一つであると思ふ。武藏野は、萬葉集の東人の歌にも、「あか駒を山野に放しとりかにて多摩の横山歩ゆかやらむ」と放牧がうたはれてをるから、對においたのであらう。(因にいふ。梁塵秘抄に王子のお前の笹草は、駒は喰めども猶しげし云々の歌がある。)

於保止利

鶴の羽に、やれなや、霜降りり、やれな、誰かさ云ふ、千鳥やさ云ふ、鶺鴒やさ云ふ、あらじあらじ、

千鳥も云はじ、鶺鴒もいはじ、蒼鷺の、京より來てさいそ、

「やれなや」を「也禮秦也」に作つてゐるが、「秦」は「奈」の誤であらう。末の「さいそ」は「さいふ」の誤か。この歌、風俗に、大鳥と題して載せてゐる。

多賀也

我が門のや、しだら小柳、さはれとうとう、しだら小柳、しだらかいてば、なそや、しだる小柳、しだらかいてばや、國ぞ富せむ、郡ぞ榮えむや、里ぞ富せむ、我家ぞ富せむや、しだる小柳、

「和伊戸」とあるべきを「和以天」とし、末句の「之太留」とあるべきを「之左留」とせるは、ともに誤であらう。この歌、風俗に、我門と題して載せてある。

奈利多加之

鳴高しや、鳴高しや、大宮近くて、鳴高し、あはれの、鳴高や、

風俗に、奈利高之と題してある歌である。

千々良女

ちちらめが、門にうそぶいまる立てり、てうごを提げて、なごかは立てりしもせざらむ、おのれがいとこ女の門に、てうごを提げて、

風俗に知々良々(一に知々皮々)と題して出で、詞句に小異がある。いとこめは、萬葉集卷



十六に「いとこなせの君」、神樂篠波に「いとこせ」とあるたぐひである。

師多乃宇良

之太の浦に、朝漕ぐ小舟や、さしろせてよ、我さへ乗りてや、之太の浦を見むや、あの、

末の「之太」を原文に「之左」とあるは誤であらう。「さしろせてよ」は「さしよせてよ」の誤とおぼしい。この歌、風俗に、之太乃浦と題してある歌で、「さしろせてよ」の句が「さしよせろ」とある。

伊世比止

伊勢人は、あやしきものをや、なぞといへば、小舟に乗りてや、波の末漕ぐや、あの、

風俗に、伊勢人と題して載せ、波の末を、波の上としてゐる。

甲斐風俗

甲斐人の、嫁にはならじ、事辛し、甲斐の御坂を、夜や越ゆるらむ、

末

甲斐がねの、さよも見しよ、けれ無く、横ばしりせる、さやの中山、

末歌は、古今集の東歌、及風俗に載せ、初句二句四句に異がある。本歌は、いまだ他に所見無きものである、純然たる短歌形式であるが、新墾道に「履はけわがせ」と歌つた萬葉集の

東歌の趣とはまた別で、甲斐の國の嶮岨で交通の不便な爲に、嫁になるのを欲しない女心を歌つてゐる。本歌に女の歌、末歌に男の歌を用ゐたのもおもしろい。

川久者禰

筑波嶺の、この面かの面にや、蔭はあれど、君が御蔭にや、増す蔭は無しや、あの、

古今集の東歌に載せ、風俗にも常陸と題して載せてゐる。

肥後風俗

しご打たな、たりたな、しごうちらら、しごうちら、たりたな、しごうちらら、どうあり、たりたななどうとらら、

この歌も、他に所見が無い。風俗といへば、殆ど東國のものに限られてゐるのに、かく九州の風俗歌が傳はつたといふのは、第一に珍らしい事である。また催馬樂の「酒飲」の如きは、その終に笛の譜が添つてゐて、「酒をたうべて、たべ酔うて、たむとこりんぞや、まうでくるよろぼひぞ、まうでくる、たんたんな、たりやらんな、たりちりら」とあるが、これは又さらに珍らしいものといふべきである。初に「しご打たな」とある「しご」は、「しだら」であらう。しだら打つといふのは手を打つことで、内宮年中行事に、「從西刻許鳥名子等、參候瑞垣御門外方撃志多良叩手也」として、鳥名子志多良歌を掲げ、また本朝世紀天慶八年



八月の條に、志多良神の歌遊の曲として、「月笠著留八幡種蔭久伊佐我等波荒田開天志太良打天止神波宣末不」ともある。この「しだら」が訛つて「しご」となつたものと思はれる。なほ、設樂神が鎮西より上洛して、舟岳紫野に着いたことは、百練鈔長和元年二月の條に見えてをる。それに關係のある歌ではなからうか。

## 陸奥風俗

名取川、幾瀬か渡るや、な瀬とも、八瀬とも、知らずうや、夜し來しかば、あの、陸奥の、櫓はいくつ、數ますとも、吾こそ云はめ、八そぢあまり八つ

この二首ともまた他に所見が無い。(原文には一首にかきつづけてある)。「なせ」は七瀬を口調の爲にしかいうたものとおぼしい。第一首の方は戀歌であらう。第二首の「やぐら」は、和名抄に、「櫓夜久良城上守禦樓也」とある。假に立てた城の矢座であらうが、當時陸奥には、數々の柵の築かれた時代であるからして、邊陲に於ける軍事の情勢も察せられて、おもしろい古謠である。(幸若舞曲の安宅に、「表のやぐら十三所、わきの矢庫九所」云々とある)

我のみや、子持たるといへば、陸奥の、はなはに立てる、松も子持てり、

我がせなを、都ゑやりて、塩竈の、籬の島の、まつぞわびしき、

みさぶらひ、御笠とまうせ、せや、宮城野の、木の下露は、雨に増れりや、あの、

「我のみや」の歌は、拾遺集卷十八に出て、二句以下を、「子もたるてへば高砂の尾上に立てる松も子もたり」としてゐる。「我がせなを」、「みさぶらひ」の二首は、いづれも古今集の東歌に出てゐる。「我がせな」を「わがせこ」とある。

## 天者乃風俗

最上川、上れば下るうや、稻舟の、否にはあらずうや、しばしばかりぞや、あの、

「天者」は出羽である。古今集の東歌に出てをる歌で、五句を「この月ばかり」とある。

## 安川末千

東路にや、刈るてふ草の、おいしきや、かい刈る草の、よこをちに、刈るてふ草の、

風俗に、安津末知として載せ、詞句に異がある。

## 安之者良太

葦原田を、七町、君作る、それこそ我しきせめ、なよらや、

他に所見なき歌である。(葦原田といふ詞は、催馬樂篠波の末歌に、葦原田のいなつき蟹のや云々とある。)次の「常陸には田をこそ作れ」や、萬葉集卷七の「春日すら田に立ち疲る」なごと同じく、これもまた労働をうたつた歌の一つである。終りの「なよらや」といふ拍子は、田歌に「なゆらや」とあると同じであらう。



常陸には、田をこそ作れ、誰をかね、山を越え、野をも越え、君があまよませるや、  
風俗にも、常陸として載せて、詞句に異がある。源氏奥入、河海抄には、この書のごとく、  
「誰をかね」とある。

多末太禮

玉垂の、瓶を中に居ゑて、主人はもや、酒菜覓ぎに、酒菜求めに、こゆるぎの磯に、若藻刈り上げにや  
上の「さかな」を「左加左」と書けるは誤であらう。風俗の玉垂の歌と、詞句に小異がある  
だけである。

伊勢風俗

伊勢の海なるや、はれ、小伊勢の海なるや、くちらの、寄る島の、百枝の松の、八百枝の松のや、今  
こそ枝さして、もとの富せめや、  
これは家の繁昌をこほいだ祝歌で、いまだ他に所見が無い。ここに注意すべきは、「くちら  
のよる島の百枝の松の」といふ言葉である。嶋は、志摩の國のうちなる嶋で、熊野に近いか  
ら鯨の寄ることもあらうが、また、志摩から伊良胡へかけては、鷹の寄るところともいはれ  
てゐる。くちらの語が、鯨であるか、鷹(ぐち)であるかといふことは、神武天皇の御製「わ

が待つや嶋は障らず、いすくはしくちらさやる」のくちらの解釋に就いても説のあること  
あるが、この風俗のくちらも、島に寄ると見れば鯨と考へられ、島の百枝松にとまると見れ  
ば鷹ともとれるので、かりそめに決しがたい。くちらの語の研究に對する新しい資料の一つ  
といふべきものである。

この次に「風俗雖有<sub>二</sub>其數<sub>一</sub>、只抽<sub>二</sub>簡要<sub>一</sub>書寫之、拍子皆以<sub>二</sub>一同也<sub>一</sub>」とある。風俗の歌がなほ  
多くあつたものとおぼしく、その中には、上述の如く今日傳はらぬものがあつたであらうと  
思はれるに、これを略したのは、まことに遺憾に堪へない。

しかして、次に一行をあけて、「支多乃見加止乃御神樂」と題し、本末に分けて九首の歌を載  
せてゐる。初は本歌一首末歌一首づつとし、最後の歌だけが、一首を本末に分けてゐる。

優婆塞が、行ふ山の、椎がもと、あなそばくし、とこよしあらねば、

末

椎柴に、幡とりつけて、誰が代にか、北の御門と、祝ひ初めけむ、

初の歌の第三句は、「とこにし」の誤であらう。しかしてこの歌は、宇津保物語菊宴の卷に神  
歌として掲げられ、源氏物語椎がもとの卷には、この歌によつて、「立ちよらむかけと頼みし  
椎がもとむなしき床になりけるかな」とよまれ、その卷の名の來由となつて、引歌の中に



も擧げられてをるもの、後のは、神樂歌の「榊」の本歌「榊葉に木綿とりしでて誰が世にか  
神の御室と祝ひそめけむ」を、北御門の神樂歌として歌ひかへたものである。

本

幣帛は、わがにはあらず、天に坐す、豊をか姫の、宮のみてぐら、

末

幣帛に、ならましものを、すべ神の、御手にとられて、なづきはるべく、

神樂歌の「幣」の本末である。

本

三島木綿、肩にとりかけ、たかにとりかけ、誰が代にか、北の御門と、祝ひ初めけむ、

末

八葉盤を、手にとりもちて、誰が代にか、北の御門と、祝ひ初めけむ、

初の歌の「たかにとりかけ」の句は、衍入であらう。(或は、たかに、たが代と重ねたのであ  
らうか。)神樂歌の「韓神」の歌と、初二句は同一で、三句以下が異つてゐる。

本

わかきあれば、みやびも知らず、父が方、母が方とも、神ぞ知るらむ、

末

皆人の、しでは榮ゆる、おほなもひ、いざ我がともに、神のさかまで、

神樂歌の韓神の「或説」と同じであるが、詞句に小異があつて、参考とするに足りる。末の  
歌、原本「太加由留」とやうによめるが、「左加由留」であらう。

本

河社、しのをりかけ、しのをりかけ、

末

干す衣、いかに干せばか、七日干すといふ、

本

これは一首を本末に歌ひ分けてゐるので、「伴哥九首之中、終哥一首分二唱」云々と左註があ  
る。この歌、貫之集、古今六帖、梁塵秘抄、新古今集等に出てゐて、詞句に異がある。

次には、介比乃神樂と題して、七首の歌を載せてゐる。この七首全部は新しく知られたもの  
である。氣比は、越前の氣比神社であらう。(栗田博士の古謠集に、越前國氣比太神宮かくら  
うた)があるが、それはこれよりも後世のものである。)

道の口くま坂山のや、葛の葉のあゆける吾を、夜獨ねよとや、神の、夜ひとり寝よとや、おけ、

末

末

末

末



葛の葉のあゆける吾を、夜ひとり寝よとや、神の、夜ひとり寝よとや、おけ、

16

「みちのくち」は越前で、和名鈔に、古之乃三知乃久知とある。「くま坂山」は、今は加賀國に屬して大聖寺町の南方にある。この歌は戀の歌であるが、或は巫女の戀を歌つたものと思はれる。この歌で注意すべきは、「あゆけるわれを」の「あゆく」といふ語である。これは萬葉集卷二十の歌「むら玉のくるにくぎさし堅めとし妹が心はあよくなめかも」の「あよく」と同じで、動搖するの意味を持つものと思はれる。(俊量記の「びんだたらをあゆかせばこそ」も、編木子を動搖せばこそ、であらうといふ説がある。)

本

越の海を、荒海と知らで、船出して、歸るに、沖に障れるや、おけ、

末

船出して、歸るにや、沖にさはれるや、おけ、

この歌は海に關した歌である。船歌は土佐日記等にも載つてをるが、田園の歌などに比べては、はるかに少ない。その點で珍らしいものであるが、殊に越の荒海に船出した船の歸りを家族の者が待ち詫びてゐるところなど、海の歌としてあはれが深い。短歌ではあるが、かの萬葉卷十六の、筑前志賀の白水郎の歌もおもはれる。

本

我が船は能登の早船、鳥なればみ坂越えて、大君に仕へまつらむ、御子たちに仕へまつらむ、おけ、

末

鳥なれや、み坂越えて、大君に仕へまつらむ、御子たちに仕へまつらむ、おけ、

前の「大君に」を、原文「於保支見下」とせる、「下」は「爾」の誤であらう。

能登の早船が詠まれてゐて珍らしい。氣比社記によるに、弘仁元年氣比神社遷宮の時、能登國より釜二口鑊二脚を、早船に載せて奉つたことがある。(早船の語は、和名鈔にも出てをり後撰集の歌にもあり、梁塵秘抄にも早船舟子の句がある。)大君に云々の句は、東國の野人の聲にも、「大君のしこの御楯」などあるが、此處にまた、北陸の邊陲にも此聲の響いてゐるのは、上代の我が國民性が忍ばれて嬉しいものである。因にいふ、正倉院文書續々修第十五帙第八卷に、越前國足羽郡江下郷の生江臣家道女及其母が、天平勝寶九歲五月二日に經を貢進した文を收めてゐる。その文中にも、上は太上天皇の御爲に仕へ奉り、退きては聖の帝の天地日月と共に動きなくおはしまさむ爲云々の文があつて、殊にこの神樂歌と同國なのは興趣が深い。(生江臣家道女の貢經文は、南京遺芳に收めておいた。)

本

17



御子みこといへば、父ちちの御子かは、すら神を、しのみやとへる、きのみこや、おけ、

末

御子みこといへば、すら神を、しのみこは、いろの、いとのみこや、おけ、

氣比の神は、應神天皇にゆかりの深い神であるから、天皇の御上などにちなみある歌であらうか。或は承和七年に位を授けられた氣比神社域内の三座は、大神の御子なりと傳へてをるのと関係があるのであらうか。「いろ」は、いろせ、いろも、いろね、いろは、「いと」は、前に挙げた「いとこ」の類で、共に親しみ愛する意にいふ詞である。

本

馬むまに乗り、駒こまに乗り、歩あきつつ來きつつき見れば、かみおほの、介比の御蔭に増すかげは無し、おけ、

末

馬むまに走り乗り、渡れど渡られぬ、瀬田の唐橋から、をゆか誰たれか行く、

この「氣比のみかげに増す蔭はなし」とあるは、上に掲げた古今集の「筑波嶺の」の歌から來たのである。また末歌は、北陸道から京の方への交通を歌つたものと思はれるが、注意すべきは、瀬田のから橋といふ言葉である。から橋の語は、三代實錄元慶三年の條、榮花物語初花の卷にも出てゐるが、瀬田の橋に就いては、平兼盛の歌に「瀬田の長橋」と詠んであつて

瀬田の唐橋といふのは、文献としてはこの歌が最も早いものと思はれる。「をゆか」の「乎」は、「加千」の寫し誤りであらうか。

本

葦北童の船出でする夜よは、我われ楫かぢとりてや、乗せて渡さむ、安部の島までに、おけ、

末

我が漕こげばこそ、な、やの船もくれ、まり定めて漕こいたべ、介比介太、おけ、

これは越前の氣比神社と、能登の一の宮なる氣多神社とへ參拜に行く船歌であらうと思ふ。本歌の、葦北、安部の嶋は明かでない。船歌の類は諸國に分布するものであるから、或は筑紫の船歌をうたひ傳へたのでもあらうか。末歌の「まり」は、「どまり」の脱であらうか。

本

みみをが埼、渡わたるは隼はやぶさ、鳥捕とらば、せなやをとらば、せたや、おけ、

末

あぢま女めらを、袖かきに搔かき入いていざ參まらむ、氣太へ參らむや、おけ、

これは女と一緒に氣太へ參詣する歌である。本歌の三尾が崎は、近江滋賀郡の地名で、萬葉にも、「三尾が崎眞長の浦」とあり、續日本紀天平寶字八年の條にも出て居る。末歌の「あぢ



まめ」は、和名鈔にある越前今立郡味真郷の女の義。萬葉集にも「あぢま野に宿れる君が歸り來む時のむかへをいつとか待たむ」とある。

次に「此哥不似例神樂哥、番之支條乃音振也」とある。「番之支條」は盤涉調であらう。

以上一々に就いて検討した所によると、その中には従来いまだ知られなかつた歌詞十五章を發見することが出来る。それは風俗歌として八章、神樂歌として七章である。元來風俗歌は、今日傳はるところ、わづかに二十七章に過ぎないに、ここに新たに八章を加へたのであつて、しかもその中には、信濃の牧歌の素朴なる、陸奥風俗の時代相を示せる、伊勢風俗の國語學上の資料たる、肥後風俗の設樂神に關係あるべくして東歌系統以外のめづらしいもの等を含んでゐる。また神樂歌では、巫女が相聞の情の切なもの、北海の船歌で、しかもわが國民性をうたつたもの等がある。いづれも歌謠史上、文化史上、意義の深いものといふべきである。

自分は、和歌史の研究のかたはら、歌謠の研究にも興味をもつて注意して來たのであるが、さきには和田英松博士所藏の梁塵秘抄を刊行し、こたび、全く埋もれてをつた琴歌譜と、この承德本古謠集を學界に紹介することを得た。かくの如く數百年來埋もれてゐたものが、世に出現するのであるから將來なほ數々の發見が爲されることと思ふ。自分は、今後の人々の手によつて、その資料の乏しい上

代及中世の歌謠が新たに發見せられ、學界に提供せられて、歌謠史のために、文化史のために、はた國語史等のために裨益することあらむことを、切に希ふ次第である。(甲子十月稿)

附言一、支多乃見加止乃御神樂に就いて、藤田徳太郎君から、梁

塵後抄に引用せる安倍家藏古鈔本に、その名と歌詞の見えてをることを注意された。後さらに、北御門は神社の名で、皇太神宮の末社であること、神宮文庫所藏の神樂歌と題する天文本の轉寫本の中に、北御門の歌があり、それは承德本とは別の歌である、風の宮の歌に、承德本の「椎柴に幡とりつけて」の三句以下と同じ歌があることを注意されたので、安倍家の後裔に、古鈔本の搜索を請うたが、遺憾ながら見あたらぬとのことであつた。(神宮文庫本の北御門の歌の一つは、顯眞の古今目録抄稿本にしるされた歌の類歌である。)

二、上述の安倍家古鈔本に出てをる「葦北童」(本歌)を除き、他に所見なしと記した十五章を更にここに列記しておく。篤學の士が研究せられむことを望むためである。

太乃之利者也

なはへ行く、たのしり早し、おのが子を、鷹にとられて、なく鳩

の、目には見えず、音のさやけさや

之奈乃

信濃野なるや、はれ、武藏野なるや、野なるや、澤なるや、信濃笹草や、馬に飼ふなや、や、はれ、駒に飼ふなや、けいのを枯らすなや、信濃笹草を

甲斐風俗

甲斐人の、嫁にはならじ、事辛し、甲斐の御坂を、夜や越ゆらむ

肥後風俗

しど打たな、たりたな、しどうちらら、しどうちら、たりたな、しどうちらら、とうあり、たりたな、なとうとらら

陸奥風俗

名取川、幾瀬か渡るや、な瀬とも、八瀬とも、知らずうや、夜し來しかばあの

陸奥の、櫓はいくつ、數まずとも、吾こそ云はめ、八そち餘り八つ

安之者良太

葦原田を、七町、君作る、それこそ、我しきせめ、なよらや



伊勢風俗

伊勢の海なるや、はれ、小伊勢の海なるや、くちらの、寄る島の  
百枝の松の、八百枝の松のや、今こそ枝さして、もとの富せめや

介比乃神樂

道の口くま坂山のや、葛の葉のあゆける吾を、夜獨ねよとや、神  
の、夜ひとり寝よとや、おけ

末

葛の葉のあゆける吾を、夜ひとり寝よとや、神の、夜ひとり寝よ  
とや、おけ

本

越の海を、荒海と知らで、船出して、歸るに、沖に障れるや、おけ

末

船出して、歸るに、沖にさばれるや、おけ

本

我が船は能登の早船、鳥なればみ坂越えて、大君に仕へまつらむ  
御子たちに仕へまつらむ、おけ

末

鳥なれば、み坂越えて、大君に仕へまつらむ、御子たちに仕へま  
つらむ、おけ

本

御子といへば、父の御子かは、すら神を、しのみやとへる、きの  
みこや、おけ

末

御子といへば、すら神を、しのみこは、いろの、いとのみこや、  
おけ

本

馬に乗り、駒に乗り、歩きつつ來つき見れば、かみおほの、介  
比の御蔭に、増すかげは無し、おけ

末

馬に走り乗り、渡れど渡られぬ、瀬田の唐橋、をゆか誰か行く

末

我が漕げばこそ、な、やの船もくれ、まり定めて、漕いたべ、介  
比介太、おけ

本

みなが崎、渡る隼、鳥捕らば、せなやをとらば、せたや、おけ

末

あぢま女らを、袖に搔入ていざ参らむ、氣太へ参らむや、おけ



